

的な政策の表れ方について批判的に検討している。主な内容を紹介する。

第1章「社会福祉をどうとらえるか」では、戦後の社会福祉の到達点と考え方について基本的な視点で提示している。第2章「新自由主義の福祉政策とはなにか」は、新自由主義の理論の問題点とその具体的展開をアメリカの例等で紹介している。第3章「介護保険と福祉のビジネス化」では、介護保険と高齢者福祉政策が「買う福祉」への大転換を図っていることを実際の経緯のなかで論述している。第4章「社会福祉法はなにをどう変えるのか」では、6月に施行された「社会福祉法」の名称変更の意味していること、具体的な法律「改正」の問題点、市場原理の本質、そして今後の運動上の課題にふれている。そして第5章「新自由主義と社会福祉実践のゆくえ」では、直接入所契約制度、支援費支給システム、市場原理の導入がいかに社会福祉実践をゆがめ、非人間化していくことになるかを問題提起している。資料も参照できる内容となっている。

(あけび書房 1400円)

(石川芳子・いしかわ よしこ・全労連国民運動局次長)

細川 汀著

「かけがえのない生命よ」

～労災職業病・日本縦断～

「働く者のいのちと健康を守る全国センター」を結成する上で山田信也先生、渡部真也先生と共に大きな役割を果たしていただいた細川汀先生とは、著書や論文などを拝見したり、電話で話したことはありましたが、今年の9月まで一度もお会いできませんでした。初めて京都で行なった全国センターの「VDT作業基準検討プロジェクト」に西山勝夫先生と共に病を押して参加して下さった細川先生は、これまでの業績や初対面を感じさせない、参加メンバーと同じ仲間と言った感じで適格な助言をして下さいました。

細川先生の最近の著書「かけがえのない生命よ」(労災職業病・日本縦断)を読ませてもらい、改めて先生の労働者・働く者への深い愛情と信頼、働く者の「かけがえのない生命」をないがしろにする経営

者や政府に対する怒り、そして働く者と一緒に研究し闘ってこられた強さとロマンを感じさせられました。

最近の「東海村臨海事故」「JRコンクリート塊落下事故」から始まる本書では、1960年代の炭鉱などでの大事故の教訓が生かされていない点への鋭い批判など、現在の問題と対比しながらこれまで先生が取り組んでこられた課題との共通する教訓や課題を明らかにされています。また、副題の「労災職業病・日本縦断」にも現されているように、学生時代の京都から始まり大阪、四国、東北、北海道、中国、九州など、文字通り「日本縦断」して、現場に行き、労働者と一緒に調査・分析し、政策化してきた各地の足跡が記されています。

同時に本書は、労災・職業病のわかり易いガイドンス本にもなっています。

頸肩腕障害、腰痛、白ろう病、じん肺、VDT作業による健康障害、振動病、チェッカー病、過労死などの解説と共に、タクシー、看護婦、山林労働者、教師、電気労働者、電話交換手、保母、鉱山、化学工場などの職業・職場と職業病、労働災害との関わりが解明されていますが、とりわけ頸肩腕障害、「保母病」「電話交換手病」の部分に多くのページが割かれ、運動面の教訓も示されています。

九州電力労働者の健康障害調査の時、「コンクリートの電柱に10メートル登ってみたらすごい風だ。足がふるえてきてどうにもならなくなって途中から降りてしまった」には驚かされましたが、国鉄労働者の健康と職場を調査するため、自ら機関庫やトンネルに出かけ、タクシー、保母、電話交換手などたえず職場、現場に行き、直接見て(診て)、聞いて、体験して調査・分析し、労働者と一緒に政策、要求をつくり、運動してきた細川先生の生き方を通して私たちへの熱いメッセージが伝わってきます。

(池田 寛・いけだ ひろし全労連・企画局長、働くもののいのちと健康を守る全国センター・事務局長)